

# 私の鹿児島歴史探索

隈元 達雄（1組）



## 《鹿児島清水城と玉龍山福昌寺》

鹿児島清水城と玉龍山福昌寺は私にとって縁深い場所である。

第一にそれぞれの跡に私の母校・清水中学校と玉龍高校があること。第二にこの二年前くらい前から始めた薩摩藩・島津氏の歴史を勉強してみようと思って通れない場所であるということだ。

とはいうものの二年ほど前までは清水城と福昌寺についての知識はあまり無く特に清水城についての知識は皆無と言ってよかった。しかしこの二つを訪ねたり、調べたりするなかで、それぞれに興味深い史実と史跡が残されていることや、関連があることが分かってきた。

私は七十歳まで約四十七年間の会社生活を全うし、退職してもまだ身体的な余力はあったので、これまで続けていた男声合唱・グラウンドゴルフ、エッセイ書き、読書など好きなことしながら毎日を通して来た。そういう生活の中であるきっかけがあり、自宅がある武岡や、周辺の常盤町、西田町、武町、小野町などに多くの史跡があることを知る。持ち前の好奇心が頭をもたげて、自分で「歴史散歩」と称してデジカメ片手に史跡巡りを始めるようになった。そしてそれ等をもとにブログやエッセイを書くようになった。

そのために、図書館で調べたり、ネットで調べたり、ときには歴史関連の講演会に出かけたりしているうちに「歴史探索」に変わっていった。そして知れば知るほど鹿児島島の歴史は薩摩藩・島津氏の歴史抜きには語れないことが、よりはっきりしてきた。

そういう中、二〇一二年二月十五日の南日本新聞に興味ある記事が掲載された。“かごしま 昔と今を見つめる”というタイトルで書かれたその記事は稲荷町に住む「上町の歴史と文化に学ぶ会」の会長の肥後吉郎という方が清水中学校の裏山にあったとされる鹿児島清水城の“山城”を一人で整備されているというのだ。二〇一一年六月から、地権者の許可を得て山に入り、行く手を阻む竹や木を地道に切り払い、作業を続けた結果、人を寄せ付けなかった山が、九月には道が本丸近くに達し、曲輪（くるわ）や空堀（からほり）、人工の断崖・切岸（きりぎし）なども見られるようになり、戦国の世の山城をしのばせるようになった、とある。

私はこの記事を見て、清水城は島津家にとってどのような城だったのかと思い、調べてみた。すると大体次のようなことが分かってきた。

暦応四年（一三四一）島津家五代当主貞久が南朝方の肝付兼重らが立てこもる東

福寺城を攻略し、六代氏久（うじひさ）をこの城に住まわせた。そこは鹿児島市の北部、錦江湾に突き出た山（多賀山）に築かれた“山城”だった。

この時期は初代島津忠久が鎌倉幕府の源頼朝から薩摩などの守護職に任ぜられてから百年くらいしか経っておらず、薩摩の豪族も力を持っていたので、自分の身を守るためには“山城”は欠くべからざるものだったのである。

そして島津氏の勢力が伸び、鹿児島が戦場になる危険が少なくなると、東福寺城では島津氏の居城として手狭であることが問題になってきた。そこで七代元久は嘉慶元年（一三八七）東福寺城から少し内陸に新たな城を築いて移り住んだ。この城こそが、その後、天文十九年（一五五〇）、十四代勝久の代まで八代にわたる当主が一六四年間、島津家の鹿児島城として使用した清水城である。

自分の母校の清水中学校がそういう由緒ある城の跡だったとはまさに青天の霹靂である。現在の校舎や校庭の場所に平城（屋形）部があり、裏山に山城があったという。しかし当時の島津家は家督争いも激しく、それに付け込んだ各地の豪族の主導権争いや下剋上の反乱を誘発するなどお家は安泰ではなかった。その後島津家の本城は内城（現在の大竜小学校）に移り、また鶴丸城へと移るのである。

内城に移転した清水城跡には、一五五六年に大乗院が他所から移転し建立された。大乗院は薩摩藩における真言宗の中心になるお寺であったが、明治元年（一八六八）の廃仏毀釈により領内で最初に破壊され廃寺となった。なお、中学校時代私たちが通学するとき渡った稲荷川に架かる「大乗院橋」は肥後の名工・岩永三郎が造ったものだったがあの八・六水害により流出し、その残材を集めて二分の一に縮小され若宮公園に移築されている。そして中学校の前には太鼓橋状を保ったコンクリート橋が新たに架けられている。また清水中学校の校庭には、大乗院の五輪塔や石像物が今も残されている。

話が幅廣したが、南日本新聞を読んだ私は、すぐに清水城の山城部を訪ねた。ところが登り口と思われる山道は立ち入り禁止の表示がなされていて、引き返すしかなかった。

それからしばらくして、同じ南日本新聞に、「鹿児島清水城山城部跡」調査整備保存活用事業発足準備の集い」という参加者の募集記事が掲載された。連絡先が先日の記事の肥後吉郎さんである。すぐ連絡を取るとそこで耳寄りな話を聞いた。

中世城郭研究の第一人者である南九州城郭談話会会長で鹿児島国際大学名誉教授の三木靖先生が、当日清水城の案内をしてくださるといふのだ。三木先生の話はそれまでの講演会で何回か聞いたことがあり、島津家の研究や日本における城郭研究の第一人者であるということを知っていた。当日、集合場所の稲荷町公民館には、





ただいた。その概略は次のようなものだった。

「七代奥州家伊久は、後に元久と戦っており、応永十四年（一四〇七）に亡くなっておりませんが、墓地の場所は不明です。福昌寺を建てた元久と対立したことから、福昌寺の墓地にはないのかもしれないかもしれませんが、詳しいことはわかっておりません」

なるほど、そうか、元久は対立した伊久の墓は建てなかったのかもしれない。これほど分かりやすい理屈はない。もしそうであれば、元久も普通の人間と同じような感情を持った人だったのかと・・・これはあくまでも私見である。

これで島津家が伊久の墓についていまだに解明できていないことがはっきりしたのだが、それだけに謎は深まった気もする。いずれ解明されるのか。

福昌寺には興味あることが他にもあり、石堀に囲まれた島津家墓地の外にも歴史的に貴重な由緒墓や石像物が多く残されている。

石堀の左側を登っていくと、右側に「歴代任職の墓」があり、開山石屋禅師の墓をはじめ沢山の特徴のある墓標が並び、ここには山側の岩肌に磨崖仏が二カ所彫られている。また住職墓の左側にも大きな三体の磨崖仏が彫られていて壮観である。さらに急な坂を登っていくと「キリシタン墓地」に到着する。

明治新政府は江戸幕府と同様にキリスト教禁止政策を続け、明治二年に長崎県浦上のキリスト教信徒を捕え諸藩に預けるのだが、鹿児島には明治三年三百七十五人が送られ廃寺になっていた福昌寺に収容された。

キリシタンたちは明治六年二月二十四日、明治政府がキリスト教を解禁し、同年十二月に長崎へ帰郷するまでの三年二か月あまりを福昌寺で過ごすのだが、その間の死亡者五十三人が葬られている。

私はその長崎の信徒たちと縁のある浦上天主堂の下二百mくらいの事務所昭和三十九年の年末から三年間、転勤族として勤務したことがあるので、長崎への思い入れは強く、その悲劇を知り胸が痛む思いがする。

## 《獅子文六の「南の風」と「江田どんの屋敷」》

私が歴史散歩を始めて武岡や常盤の史跡をまわり、写真を撮り、図書館やネットでいろいろ調べ始めたころ、タイムズグよく南日本新聞に二つの記事が掲載された。平成二十三年十月十四日のことである。



“特捜指令”「町名誕生百周年の常盤町で史跡めぐりをせよ」という記事で「千眼寺跡（薩英戦争本陣跡）」「常盤谷飯屋跡」「江田殿の屋敷跡」「水上の御飯屋跡（東・西密屋跡）」などが地図と写真と文章で紹介されている。

それまでに「江田どんの屋敷」のことは情報が少なく、唯一「常盤町之史蹟」（昭和十四年八月三十日発行・鹿児島県立図書館蔵のコピー本）のなかで「長屋門」として紹介されていたのを知りだけだった。

そこには、「七八七番地にある江田氏の門は、春日町にある旧川上氏の門と共に武家屋敷の長屋門として、鹿児島島に二つより無い貴重な建物である。尚、全氏宅の庭園及び住宅は旧幕時代のまま保存されておるので、諸種の研究上参考となるべき点が多岐に及ぶ」と記されている。ただこの記述も七十年前のものであり、現在は一部石垣を除きその面影はない。

さっそくその新聞を片手に再度それらの史跡をめぐる始めたが、大まかな地図であり、現地に表示のないものがほとんどのため、場所さえ特定できないものも多い。「江田殿の屋敷跡」もその中の一つで手がかりさえつかめない有様だ。

そんな中、ネットサーフィンをしながら探していたところ、「薩摩の石組み」と言うサイトに行き当たり、「江田どんの屋敷」のことが少し分ってきた。

それによると、江田家は薩摩藩の中級武士の家柄で、安政四年（一八五七年）江田国雅は藩主斉彬のとき、御鉄砲奉行役、御使番役であった。約二百年前に作られた江田邸は今はない。

江田家は神当流馬術の師範家であったと言われ、当時の主座などの配置図は記録として残っている。現在、屋敷跡の確認は難しいが、水上坂沿いの僅かに残る石垣にその名残を見ることが出来る。（石垣に排水口がある）とあり、石垣の写真も写されていた。

喜んだ私はすぐさま現地を再度訪れて、今度はそれを確認し、写真も写すことが出来た。そして自分のサイトにそのことを書いた。

するとそれをご覧になった「やまももの部屋」のやまもさんから耳寄りな情報が寄せられた。「古地図にみるかごしまの町」（春苑堂出版一九九六年）に次のようなことが書いてあるというのだ。

「少し水上坂寄りのところに二百年前の武家屋敷『江田邸』があった。江田どんの屋敷と呼んでいたが、江田家は新番という中級武士の家格であった。

薩英戦争、西南の役、太平洋戦争と三回も戦火にあった鹿児島では、二百年前からの家は大変貴重な珍しい建物であった。子孫の方が現に使用してこられたので、文化財指定や観光資源としての公開を嫌い宣伝することもなかった。獅子文六の小説『南の風』で主人公の親戚の家として登場する。（中略）惜しいことに数年前に取りこわされたと聞いた。」

これを見た私は、「南の風」をすぐにも読みたいと思い、図書館で借りること

などを思い巡らしながら、何気なく我が家の本棚を見ると朝日新聞社発行の「獅子文六全集」が目についた。

自分で買った覚えはないし、読んだ覚えもない。後で家人に聞くと四十年くらい前に小倉の叔父宅が引越すときに、廃棄しようとしていたので、もらってきたとのこと。本好きの私が何故目にも留めなかったのか今でも不思議である。

本棚には第一巻から第三巻までの三冊がある。これも後で調べたところでは十六巻発行されている。私は祈るような気持ちで第一巻から目次を見た。すると第三巻の最後に「南の風」があるではないか。なんとという幸運。

よく見るとこの小説は、昭和十六年五月二十二日から十一月二十三日まで朝日新聞に連載されたのである。私が生まれたのが、昭和十五年だから、私がよちよち歩きをしていたであろう今から七十一年前の小説である。なんとも不思議な縁を感じた。早速読み始めた私は、すぐにでも「江田どんの屋敷」の描写のあるところにいきたかったが、ぐっと我慢して初めから読み進んだ。

主人公は宗像六郎太という無為無能で、東京では「動かない置時計」と呼ばれているくらいの春風駘蕩とした非神経質な男である。

母親は鬼頭院家という薩摩の名門の出身である。亡父は男爵だったが、郷里は鹿児島で、先祖は下級武士で祖父は足軽だったという設定である。

物語は西郷隆盛の渡南説などもあり、奇想天外に展開するのだが、ここでは主要なことでないの割愛する。

そんな六郎太に母春乃が、薩摩武士の精神を教え込もうと妹康子も連れて三人で鹿児島を訪ねるところから、「江田どんの屋敷」のことは始まる。

「車は舗装のできた広い路を走りだした。白亜の堂々たる建築が二つ三つ見えた。県庁とか市役所とかいう話だった。鹿児島も相当な近代都市だと思わせた。そのうちに往来が狭くなり、家並みが低くなってきた。建築にこれという特徴がなく、潤いの欠けた殺風景な印象を与えた。車は長い橋を渡った。甲突川という河だそうだ。やがて町外れの風景になって山が両側に迫ってきた。ついに車の駐まったところは、一軒家の古色蒼然たる武家門の前だった。」

当時の鹿児島市には、私たちが本駅と呼んでいた鹿児島駅と西駅と呼んでいた西鹿児島駅（現在の鹿児島中央駅）の二つがあったが、小説の描写からすると三人の親子は、鹿児島駅に降り立ったことになる。その後、車から見えた景色や着いた場所などから、その親戚の家というのが常盤町の「江田どんの屋敷」をモデルにしていたに間違いのないと思われる。

その親戚と言つのは、母親から駅頭で「六郎太と康子でございます……中郷の叔母さんですよ」と紹介されたことから、中郷家という母方の親戚だろうと思われるが、それ以上のことは書いてない。

「そこがお鹿さんの家だった。『さ、どうかお入りやっただもんせ』と、お鹿さんは、ボンヤリ佇立っている六郎太を促した。

彼はべつだん遠慮をしたのではなかった。古いというよりも今や、崩壊に瀕している門の柱や扉や苔蒸した瓦を眺めていたのである。（中略）原形そのものを見たのは、これが初めてだった。

門を入ると、砲臺のような石垣が邸内を覗かせまいとするように聳えていた。それに沿って曲がると、初めて傾斜の上に玄関が見えたが、家屋に達するには三本の道があった。

一つの石段は、真っ直ぐに玄関に達していた。もう一つの石段は、それに平行して些か低く、内玄関のようなところへ迂回していた。最後の道は、石も敷いてなく、植え込みと隔てて勝手口へ行くらしかった。」

六郎太は、ともかく自分はお客さまだと思って、躊躇なく、第一の道を登った。そのあと母親と妹は、内玄関に続く第二の道を登ることになる。最初の男道、次が女道、三番目が出入りの商人や召使の道で、それを間違えたら人間の道を踏み違えたほど笑われたものだったそうだ。

その他にも、洗濯の盥（たらい）、物干し竿、洗面器も別、女は男より先に入浴しないなど薩摩の掟はいろいろあったが、これらは世に上いられているような男尊女卑の思想からではないと、この小説には書かれている。

「六郎太一人が靴を脱いだ玄関は、門に比べると意外なほど小さかったが、シンとして薄暗く不思議な威厳があった。もし彼に芝居気があったら「頼もう」という挨拶を発したであろう。

やがてお鹿さんが現れて、彼を奥へ案内した。曲がり縁を二度ほど曲がって、眼下に庭の見える八畳の客間へ通ると、中廊下から母親や康子も出てきた。

そこでまた、改めて長い挨拶が始まって、母親は、持参した土産物などを出した。それが済むとお鹿さんは、強いて六郎太を床の間の前へ座らせた。」

「ちょうど、時間は十二時半頃だった。かねて用意がしてあったとみえて、お茶の出た後にすぐ食事になった。

女中が高脚の膳を献げて、六郎太の前に据えた。それはいいが、二度目に現れた時には、お鹿さんと二人でちゃぶ台を運搬してきた。母と娘とお鹿さんと三人分の食事が載せてあった。

六郎太一人が、殿様として蒔絵の膳の前へ座っているのである。『なんちゅてん、百七十年にもなりもすで……』

とお鹿さんは、しきりに屋敷が古く荒れ果ててることを弁解した。」

これらは、極端なようであるが、男尊ということはあるても女卑ではなく、人間の種類を分けるのに男と女ではなく、殿様と家来の二つがあるということが基に

なっていたとのこと。今考えると違和感を覚えるが、これが当時の考え方だったのだ。

「島津公が江戸へ参勤交代の途次、この座敷で休息したこともあった。

(中略)間数は全部で十一間で、勿論平屋であるが、地位(じぐらい)が高い上に、さらに石留の盛土をして土台ができています。その上に廊下よりも座敷が一段高くなっているのです。そそっかしい者は、年中ケツまずくだろうが、すべてそうした設計の目的は、高きにいる武士の心を養わんがためである。

床下に悉く、敵重な柵を張ってあるのは、敵の間者が忍び込むのを防ぐ用心である。広い屋敷に押入れが一つもないのは、事ある時に襖を取り払って、槍、長刀を自由に振わんがためである。——というように説明を聞きながら、家の中を順々に歩いて行くうちに、六郎太は一抱えもあるような自然石の手洗鉢を見た。

(中略)やがて彼らは、下駄を履いて門へ案内された。門といっても、長屋つきの武家門は、細長い家のようなものである。

その部屋は、御一新以来使わないので、それこそ狐狸が棲みそつだった。

『こゝア、物見部屋ごあすと・・・』武者窓に簾が掛けてあって、窓際に床几が置いてあった。それに腰かけて、家の主人は、外を通る農夫や商人の片言隻句を聞いて、下情上通や弾圧の緒(いとぐち)を捉えたのだそつだ。

仲間部屋(ちゅうげんべや)は、いかにも寒そうな三畳だった。その隣が駕籠部屋で鼻を掴まれそうに暗かったが、よく見ると、一台の塗駕籠が寂然と置いてあった。封建時代の埃が、一寸ほども積って・・・家そのものが博物館のようで・・・」

「南の風」における「江田どんの屋敷」の描写の部分は他にもあるが、大体これまでに書いてきたことに尽きる。

私の読んだ「獅子文六全集 付録月報No.四」(昭和四十三年八月)によると、当時(昭和十六年)、朝日新聞の学芸部次長をなさっていた先祖が、鹿児島出身の後醍院良正氏が「『南の風』と文六さん」という文章のなかでこの小説を書いてもらうために担当者として交渉したことや、鹿児島弁にもいっくらかかわったように書いておられる。



そのほか、本巻には獅子文六が昭和十六年二月に鹿児島に取材旅行に来て、南州神社の西郷さんの墓地の前で写った写真もある。

このあたりまで書いたところで、新聞記事の基になった常盤町の百周年記念の一環として発行された「常盤町名 誕生百周年 記念誌」を見るチャンスに恵まれた。

町内会長の挨拶、鹿児島市長の祝辞に続いていきなり「常盤の武家屋敷跡(江田どんの屋敷の謂れ)と歴史の記録」という表題で、前

記「常盤町之史蹟」の編纂者、弟子丸方吉氏(常盤出身)資料より、という形で歴史と解説がある。

この記述も初めて知ることも多く素晴らしいのだが、何よりも驚いたのは、立派な庭園に立つ紋付袴の主人と思わしき人を中心に全て和装の八人の男女が写った写真である。

主人の頭にチョンマゲは見えないので、そういう意味では比較的新しいものかもしれないが、よくこのような写真が残っていたものだ。

そしてもう一つあった。それは「江田邸の母屋」の見取り図である。「南の風」の描写では、頭の中でも見取り図を描くことは出来なかったのだが、十一部屋、建坪八十四・三五坪の全貌が表れたのだ。

「江田どんの屋敷」を調べ始めて、やまももさんからのご助言や一級の資料などにも行き当たり、一心の目途をつけることができた。

尚、「鹿児島大百科事典」(南日本新聞社発行)の「江田邸」「武家屋敷」でもこれらを裏付けることが出来た。

### 《島津家と江田家のつながり》

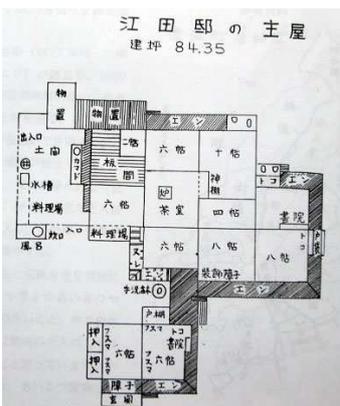
前記「獅子文六の『南の風』と『江田どんの屋敷』」のついでに、島津家とその江田家のつながりについて書いてみたい。

言うまでもなく島津家は鎌倉時代以降、島津忠久を始祖とし、代々薩摩他の守護となり、十八代当主・島津家久からは薩摩藩主として七百年近く鹿児島を支配してきた。

一方江田家は薩摩の武士だが、身分は新番とよばれる中級武士だった。当然のことながら主従関係にあったのだが、そのつながりを調べてみようと思ったのは次のようなことがきっかけだった。

いつも月曜日の南日本新聞に楽しみにしている連載記事がある。歴史作家・桐野作人の「さつま人図誌」で、二〇二二年三月十二日の記事は「島津綱貫継室・鶴姫」とある。

読み進むと驚くべきことが書いてある。鶴姫とは誰であろう。なんとあの「松の廊下」で有名な吉良上野介義央(きりこうすけのすけよしひさ)の娘が鶴姫と言い、島津家第二十代当主・薩摩藩三代藩主の島津綱貫(一六五〇～一七〇五)の継室(後妻)だったというのだ。



吉良家も名門ではあったが、大藩の島津家とは家格が違いすぎたため、鶴姫の弟で養子として米沢藩主になっていた上杉綱憲の養女という形で縁組したとのことだ。ときに綱貴二十六歳、鶴姫十六歳だったという。

しかし、五年後の延宝八年（一六八〇）、子供が出来なかったからなのか離縁されてしまう。そのことが後に吉良家を巻き込んだ松の廊下刃傷事件や赤穂浪士の吉良邸討ち入りに島津家が関わらずにすむという結果になった。

婚姻が続いていれば、島津家もその渦に巻き込まれていたかも知れないというのだ。それを読んで私も天の微妙な配剤を感じることもあった。

それより前、私が常盤散歩をするなかで、常盤谷御飯屋のことを調べたとき、この御飯屋が、島津綱貴の別邸であったことを知る。

自分の住む近いところに綱貴公の存在があったことを知り、フリー百科事典・ウィキペディアで綱貴公のことを調べるなかで、ご夫人のことも調べてみた。そしてその中に「側室・お豊の方（家臣・江田国重の娘）」（鶴姫の離縁後は対外的に「継室」と称された）とある。

常盤谷御飯屋と「江田どんの屋敷」は目と鼻の先の近さなのだが、その二つが私の頭の中で結びついた。なんと江田家の娘・お豊が綱貴公の側室の一人になっていたのだ。まさに晴天の霹靂である。

そこで手許に借りていた「常盤町名誕生 百周年記念誌」を詳細に読み返してみた。すると次のように書いてある。

それは、昭和十四年発行の「常盤町之史跡」の編纂者、弟子丸方吉氏の資料よりということ。「常盤の武家屋敷跡（江田どんの屋敷の謂れ）」と歴史の記録」という記事の中にあつた。

「天保五年、江田国雅によって誌された、江田家、家譜によれば江田家の祖、国重は薩州阿多田布施邑の郷土、有馬千石衛門重次の二男であつたが、江田重兵衛の俵米二十包を買い求めて江田氏を姓とし、ついで貞享四年、藩主島津綱貴の命によって鹿児島城下土となった。これは国重の女於豊が貞享三年綱貴に召されたからである」とあり、間違いなく於豊は「江田どんの屋敷」の江田家の出であることが分かった。

続けて「この女性は元禄七年には綱貴夫人となり五男五女あり、その息は花岡、垂水、宮之城、吉利、佐志の領主となっているほどである」とあつた。

「さつま人国誌」の綱貴公と鶴姫のことがきっかけで、継室の江田国重の娘・於豊のこともはっきりしたので、綱貴公の正室や継室、側室、またその子供たちであることを少し調べてみた。

島津綱貴の正室は、常照院・鷹司松平信平の娘・米姫だったが一六七三年早世。それ以上のことは現在分からない。

継室（後妻）として一六七六年に上記、吉良上野介の娘・鶴姫が入るが一六八〇年には離縁されている。そのあと、一六八六年に召された信証院・江田国重の娘・於豊が一六九四年には夫人になる。それより前から側室として蘭室院・二階堂宣行の娘・お重もいた。

米姫と鶴姫には子供は無かったが、お重の方と於豊の方の子供はどうだったのか。資料によつては、あと一人側室がいたという説もあるが、その詳細は現在分からない。

お重の方（二階堂宣行娘）との間には、四男一女があり、長男「吉貴（忠竹）」（一六七五〜一七七七）は四代藩主になっている。

一方於豊の方（江田国重娘）には、五男五女があり、三男忠英は花岡島津家養子となり、当主となった。四男忠道は島津久憲養子となり、垂水島津家八代当主島津忠直となった。五男久方は島津久洪養子となり、宮之城島津家七代当主島津久方となった。六男清純（一六九六〜一七二四）は禰寝清雄の養子となり、吉利領主になっている。尚、禰寝家は後に小松家と改姓した。

そしてこの小松家は後に肝属家から養子となり、幕末島津家家老として活躍した小松帯刀の家系である。七男 久東は島津久当養子となり、佐志島津家当主となった。また長女・龜姫（一六九〇〜一七〇五）は関白近衛家久室。次女・栄姫（一六九八〜一七七二）は松山藩主久松松平定英室となり、後に離別され剃髪して仏門に入り、信解院と号した。

奈百姫（一七〇一〜一七一九）は島津久智室、五女・剛姫（一七〇三〜一七二二）は桂久音室となっている。もう一人の女子は夭折したのか、詳細不明である。

このように、江田国重の娘・於豊の方の子供は島津家藩主にこそなっていないものの、それぞれ名をなしている。

それからもう一つある。綱貴公のご夫人・常照院殿（米姫）、継室・信証院殿（於豊）とその娘・信解院殿（栄姫）の三人が常盤の隣町である武町のいわゆる「島津どんの墓」

（寿国寺跡にあつたが、現在は区画整理と新幹線トンネルなどにより跡形もない）に埋葬されていた。

この墓地には全部で四基しかなく、そのうち三基が綱貴公の縁者であり、しかもその中の二基は信証院殿・於豊その人とその娘・栄姫・信解院だった。

たまたま常盤谷御飯屋と「江田どんの屋敷」から数百メートルしか離れていないが、それとは関係のないことだろうし、どう解釈すればよいのか。

それを知るためには、島津家の当主以外の墓地の在り方を調べる必要があるようだ。もっとも上記区画整理等の事情により、現在はこれのお三方を含めて四基とも福昌寺跡墓地に改葬されているという。

「こうして歴史の一つのヒントからいろいろなことを調べていくと、次々と新しい事実が浮かび上がってくる。だが今回も中途半端な究明に終わり、現段階で全てを説明することは、出来なかった。これが専門家ではない私の限界かも知れないが、あきらめずに他のテーマにも取り組んでみたい。

私の最近の生きがいになっている「歴史散歩」に始まり「歴史探素」に行き着いたこの二年間の中でその中心になったことを書いてみた。興味の湧いた人はこの二つを訪ねてみませんか。いつでも案内しますよ。

歴史は「歴史上の出来事や人物を現代の目線で読み解く」とか「歴史から過去を学んで未来を知る」とか言われるが、とてもそのような高邁なところには到達しない。だが精一杯歴史を楽しむことは出来る。

人生の終焉を迎えつつある年代に入った今、思うことも多い。だが、逆にいうと束縛から放たれてまだ四年である。「これからが人生だ」という想いで命ある限り懸命に生きてみたい。

同期生諸君「いつまでも青春」でがんばろう。

#### 参考資料

- 「島津家おもしろ歴史館」尚古集成館
- 「あるく みる いこう かんまち本」
- 「さつま人国誌」から「島津綱貴継室・鶴姫」桐野作人
- 「武郷土誌」武小学校PTA郷土誌刊行委員会、昭和四十九年
- 「常盤町名誕生百周年記念誌」常盤町内会 平成二十三年
- 「江戸大名家系譜」ネット情報
- 「島津綱貴」フリー百科事典・ウィキペディア
- 「上町維新まちづくりプロジェクト・かごしま探検の会
- 鹿兒島清水城ガイド養成講座」テキスト 三木靖 他

#### 《WJNET「自分の歴史探素」は》

「八期通信」の集大成を、創ろうかと大石くんから話があったのはちょうど一年くらい前だった。私にも何か書いてみないかと言っ。

それまでに「八期通信」にエッセイもどきを二回投稿し、大石くんのホームページにも下手な私の文章を二、三篇取り上げてもらっていたこともあり、何か書いてみようと思いついた。

実は数年前から五年間くらい、先輩の主宰する短歌を主とする文芸誌に自分の未熟さも顧みず「エッセイもどき」を投稿していて、文章を書くことに興味を感じるようになった。テーマは書く時になって思い付いたもので、「戦前戦後の子供時代のこと」「就職してから住んだ北九州・長崎・徳山時代のこと」「読んだ本のこと」「男声合唱を中心とする歌のこと」「旅の思い出」「仕事のこと」「子供・孫のこと」「市民農園を借りて楽しんだ野菜作りのこと」「グラウンドゴルフや散歩のこと」など種々雑多である。時代もテーマも行ったたり来たり。それでも六、七十編くらいになったときに振り返ってみると、自分史と言えなくもないものになっている。もちろん自分が歩いてきた長い道のりからみると、とても書き尽くしたとは言えない代物である。しかし、あるときその書くことにも一つの転機が訪れた。その先輩が横須賀に引越されたのだ。（先輩はそれから休むことなく毎月文芸誌は発行中である）ちょうどそのころである、私が歴史散歩を始めたのは。読むものも、書くものも薩摩の歴史一辺倒になり、今回のようなものを自分なりのまとめとして、また記憶のために書くようになった。そればかりではない。五年くらい前から始めたブログも最近歴史ものがほとんどである。

今回投稿の《鹿兒島清水城と玉龍山福昌寺》は、最近の自分の興味を書いたものであるが、《獅子文六の「南の風」と「江田どんの屋敷》、《島津家と江田家のつながり》は以前それぞれ一つの文章として書いたものである。そのために、重なった部分もあり、全体から見るとおかしな文脈になっている部分もあると思うがお許しいただきたい。

文中にも書いたように「清水城と福昌寺」は自分と大きなつながりがあり、「江田どん」関係の二つは私が生まれ、途中二十数年のプランクがあったものの、現在も住む武、武岡周辺に因む話である。歴史の題材が身近に転がっていることを知った私は、その後いろいろな情報を集め次々に訪ねている。

特に最近はいくつ石造物に興味を持ち、墓地を訪ねることも多い。その話をコーラスの仲間にする。「そいで！おまんさあがうしとい ないかついちゅと」と冷やかされたりする。実際そういう場所は風なお暗く誰もいない場所が多く、写真を写すと自動でフラッシュがさく裂する。しかし、しほらくはやめられそうになら。そういうことで、「自分史」までに手が回らないのが実情である。

尚、拙ブログは「わたしのブログボックス」で検索できる。